批評・紹介

「支那繪畫史」 内藤湖南著

菊版三八一頁、挿圖一八九圖
弘文堂發行、定價六圓五拾錢

本書は故内藤博士が生前に於て、或は京大の講義に或は諸雜誌の論文に、或は學者文人畫家の集會に於ける講演に、夫々その深く宏き蘊蓄の一端を發表せられたものを令息乾吉氏が一冊の書に編纂せられたものである。博士の支那繪畫史研究に於ける偉業が何等かの形に於て纏められ、東洋西洋の諸美術研究家や一般知識人を啓發される機會の來るべきことを豫てより待望したのは私一人ではないであらう。本書は菊判三八一頁挿圖一八九の體裁をとつてゐるが、編者は挿圖の採擇に非常な苦心を拂ひ、故博士の鑑識にかなふ限りの作品は出來るだけ多くの畫蹟を挿入し、そのコロタイプ製版には特に鮮明を期し、本文用紙も銅版印刷に便にするため、わざ〳〵アート紙がえらばれてゐる。けだし、歴史的な事實と畫論とに對する鋭き批判力に加へて、故博士の深い鑑賞力の結晶である諸論文には編者のこのやうな細心な用意があつて始めて、本書編纂の功成ると言ひうるのだし、又本邦に於て支那繪畫史の著書は本書によつて始めて模範的なその體例を定められたと言ひうると信ずる。

内藤博士の支那繪畫史論の基調となつてゐることは支那の繪畫が世界でも有數な文化産物であり、支那人の南畫は何れは世界の藝術に大きな影響を與へないではおかないであらうとの強い博士の信念である。このことは本書所掲の論文「南畫小論」(支那藝術の世界的位置)――これは大正十年十一月南畫院講演で發表せられた――でも述べられてゐる。

「世界中最も爛熟した文化を有つて居る所の支那の時代精神を代表した南畫が、今日の藝術に最も大きな影響を及ぼすであらうといふ事は殆んど疑ふの餘地が無い。それ故支那の繪畫殊に近代の南畫が世界の文化及藝術と、將來如何なる關係を有つべきものであるかといふ事は、支那の藝術の變遷、殊に支那繪畫史の研究から始めなければならぬ所以はこゝに存するのであ

る。然る後に南畫といふものゝ眞の價値が始めて明らかになるのである。今日に於て東洋の藝術を研究せんと思ふ人には斯くの如き用意が最も必要であると思ふ。」

從つて、支那繪畫史は南畫を完成せしめるべく發展してきたといつてよく、この發展の道程を辿つて行くのが研究者の仕事である。そして、博士によれば、この發展の頂點は元末の四大家（黃公望、吳鎭、倪瓚、王蒙）であつて、これ以前の宋元畫は中古的なもの、これ以後淸初の四王吳惲に至るまでを近世的なものと大別せられ、前者は作意を重んじ、習熟に依つて仕上げられた畫であり、主として專門畫家の畫であり、後者は率意を重んじ、自然の手法を專らとした畫であり主として高人逸士といふべき素人の畫であつた（本書所揭「元末の四大家」參照）。このやうに湖南博士の敎說によつて吾々は始めて南畫の支那繪畫史上の歷史的位置づけを理解することが出來、美術史の獨斷的なまたは偏頗な論斷が排されて、正しい歷史叙述の道が展げられた。美術史は深い作品の理解を基礎として、他方では美術家とは彼等を圍繞する文化社會との交涉を廣く深く鳥瞰することでなければならぬ。卽ち詩文書畫あらゆる藝術に優れた人が描く「士大夫の畫」は特種な複雜なる視覺（藝術的活動）が豫想せられねばならない。同時に「書を書くやうな積りで畫を畫いた」（元末の四大家）とか「士大夫の畫とは隸體畫（隸書を書くやうな氣持の畫）である」とかいふことが言はれてゐるやうに、支那繪畫の藝術的活動が世界に稀なる種類のものである所以は、他方、畫家たちの特種な社會的狀態にもその原因を求めねばならない。湖南博士の繪畫史觀は鋭い繪畫に對する鑑識を包んで廣く文化史的な雰圍氣を用意されてゐるのであつて、空氣を無視して綠樹の生理を說く美術史の誤つた方法論の多い學界に、豐かな藝術そのもの及びその運命をくりのべられる觀を與へる。

支那繪畫の鑑賞といふことは、今日の知識人には、すでにもうそんなに容易なことではなくなつてゐる。第一に個人の限られた收藏品だけでも見る機會はとぼしい。第二に本邦美術とちがつて、日本國內に保存されてゐる點數はきはめて少數であり、第三、肝心の支那本土では散佚をきはめてゐる。從つて、宋元以來の

南畫にしても、各時代々々の代表畫家の代表作さへも鑑賞する機會が惠まれてゐないのである。內藤博士の新著の挿圖によつて、始めて百點以上もの支那畫を見る人はこの書の讀者の大多數であらう。隴を得れば蜀を望みたくなるのは自然である。これらの挿圖に示されたる名畫の類が、一日も早く美術館や博物館でゆつくり鑑賞しうる機會が望ましい。更に、之等の名畫の細部を寫眞にとり、適當な支那繪畫史の圖錄が出版されたならば、今日盛大となつた西洋畫の鑑賞に劣らず支那畫の偉大さが徐々に知識人にも理解され始めるのではないかと考へる。かくてこそ湖南博士の學界、畫壇を啓蒙された功は更に一段と高められるのではあるまいか。

〔長廣敏雄〕

「中國藝術論叢」 滕固編

四六版一六七頁、民國二十七年
長沙商務印書館刊、定價一元

本書は原名「教育部第二次全國美術展覽會專刊」として、同展覽會の期間中會場で發行されたものに新たに二篇を加へ商務印書館より重印刊行されたものである。先づ吾々の目をひくのは本書が民國二十七年七月長沙に於て發行されたことである。事變勃發までは上海同書館發行の書が何れも末尾にさきの上海事變以來の憎惡にみちた激烈な文字を連ねてゐたのに對し、今やそれらに代つてたゞ「長沙」なる文字のみが吾々の胸を强く衝いて來る。上海より長沙への商務印書館の遷移は同時に支那政局推移の運命を物語つてゐる。吾々には目前の讐たるを忘れて、文化と學問を愛し吾々と同じく最後の共通なものを求めて苦惱する今日の支那文化人乃至學徒に對して、同情の念切に湧くものがある。かゝる同情の念は單なる感傷ではなく學問的理性の最後の信念である。あくまでも明日の東洋は同一世界たることを自分は信じて止まない。さて以下に於て本書所收の重な論文の內容を紹介して見よう。

鄧以蟄「書法之欣賞」。書家が概して畫をよくするのは要するに書畫同源の理に本づくものであることを先づ述べ、次いで個人の書格によつて書體の變化は促進されるが、新書體の出現は決して個人によつては創造されず漸次に進化して現はれるものであることを「八分之說」によつて說いてゐる。この說は例へば篆の時期に於いては篆八隸二の關係であり、その變化が進め